

# 自動車産業の行方と 塑性加工の将来

日本金型工業会 横田悦二郎\*



## EV は正義の味方だろうか？

最近、テレビや新聞などのマスコミでは「近い将来、確実に“環境に優しいEV”の普及が進み、現在の“環境に悪い影響を及ぼすガソリン車”は消滅の道を進んで行く」との話題が多く伝えられ、環境問題に対しては「EVは正義の味方でガソリン車は悪の権化」のような位置づけにさえなっている。確かに、筆者は2年程前本誌に掲載された「中国・深圳の衝撃」の中で、「日本ではEVの普及が始まっていないが、深圳でのバスやタクシーのEV普及率を見ると近い将来、確実にEVの普及が始まりPHEV（プラグインハイブリット車）を含めると2030年までには確実にその普及率30%程度になる可能性が高い」と記述した。

掲載後、筆者に対して塑性加工企業経営者などから幾つかの反応があったが、そのほとんどは「中国は高効率なガソリンエンジン製造技術がないのでエンジンが不要なEVに頼るため、必然的にEV化の道を進むが、環境破壊の影響が小さな優れたエンジン技術を持つ日本ではEV普及は未だ先の話で、暫くは現状のハイブリット車を含んだガソリン車時代が続くであろう」との意見であった。当時は、日本ばかりでなく、ブラジルの金型産業や塑性加工産業を含む素材材分野の経営者も

「ブラジルの車は既に自然環境を配慮して、トウモロコシを原材料としたエタノール燃料が主流になっているので、単に“環境に良い”だけの理由でのEVへの転換はないであろう。その中でも、特に塑性加工業者への影響は将来とも少ないと考える」の意見や、アジア各地の新興国の塑性加工産業では「そもそも新興国は今でも電力不足に悩まされているのでEVに使う電力の余裕はない。EVの普及の前にガソリン車の普及が先になるので、特に我々の仕事は変わることはない」の意見が中心であった。しかし最近の動向を見ると、その流れは完全に変化し、今や日本ばかりでなくEVへの転向に対して“否定的な考え”だったアジア諸国の素材材産業の業者でさえも、「国際的なカーボンゼロ活動の流れが急速に進み、今後の新車開発の中心はPHEVもしくはEVになるであろう。もしかしたら、水素自動車のような燃料電池車が普及する時代も近いかも知れない。そうなった時、我々はどうか対応したらいいのであろうか？企業変革は避けられないかも知れない」の流れになっている。筆者はこの極端な“EV化への傾斜”に対しては、技術的な面から考えると多少疑問があるが、自動車顧客市場のゼロカーボン化への認識の強さを考えると、近い将来、確実にEV化への傾斜が進むことになり、塑性加工業界にも大きな影響を及ぼすことになると思えざるを得ない。

本稿では、その時に備え塑性加工業界は今から何を覚悟し、変化した後でも企業存続を図るため

\*（よこた えつじろう）：学術顧問